
魔法少女リリカルなのは ～大空と大地～

紅の牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～大空と大地～

【Nコード】

N0993Z

【作者名】

紅の牙

【あらすじ】

神様に間違っつて殺された少年はREBORNの力をもらつてリリカルなのはの世界に転生した。さあ、原作ブレイク、つて住んでる所ミッド!?ブレイクできないじゃん!?主人公は準チートです。それでもよろしければ見てください

プロローグ

「……………」

俺は真っ白な空間に立っていた

「……此处、どこ？」

俺は訳が分からなかった

「確か俺は、REBORNを読んでいたんだよな。つで、急に目眩がして……さっぱり解らん」

「あゝ」

「うん？」

俺が記憶を思い出していると、後ろから声を掛けられた。振り向くと、そこには聖闘士セイヤに出てくるサーシャさんそっくりな人がいた

「どちら様ですか？」

「あ、すみません。私はアテナと言います」

「マジですか!?(何でこんなにそっくりなの!?)」

「それで、．．すいませんでした!!」

アテナ様が俺に頭を下げた

「謝れる理由が解らないんですが」

「実はですね、貴方は死んでしまったんです」

「な、何だと．．．」

「私の部下が、間違つて貴方の書類にハンコを押してしまつて．．
」

「それで、死んじゃつたと」

「．．．はい」

「．．．それで、俺はこのまま天国にGOなんですか？」

「．．．怒らないんですか？」

「貴方に怒つた所で俺が生き返るわけじゃないですからね」

「そうですね。それで、先程の答えですが。貴方には他の世界で
新たな命で生きてもらいます」

「ほうほう」

「行先は『リリカルなのは』の世界です」

「ちよつて待て！！リリカルなのはつてアニメですよね！？」

俺はアテナ様の言葉に待ったをかけた

「貴方は平行世界つて知ってますか？」

「ええ、知ってますけど。それが………ああ、成程」

俺は理解し手を叩いた

「つまり、俺の世界ではアニメでも平行世界では現実としてある。そう言うことですね」

「はい、その通りです。それで、お詫びとして、4つまで貴方に力を与えます。何がいいですか？」

「ふ〜む」

俺は考え始めた

「じゃあ、REBORNの『大空』、『大地』の炎。ツナの『超直感』。ナツツ、正し、ボックス兵器じゃなくて、キャロのフリード見たいな感じ。後はデバイスかな」

「………」

「どうしたんですか、ハトが豆鉄砲を喰らったような顔をして？」

「い、いえ。他のひとは仮面ライダーの変身ツールだとか、王の

財宝などを頼んでいたものですから」

「あく成程。俺は努力して力を得るタイプなんで。まあ、超直感
はチートだけど」

「解りました。デバイスと使役獣にかんしては後でお送りします」

「はい、ありがとうございます」

「では、貴方の歩む道に幸のあらんことを」

アテナ様がそう言うと、俺の意識が再び途切れた。そして

「おぎゃああああ・・・解ってはいたけど。まさか、また赤ん
坊からとはな」

こうして、俺の新たな人生が始まった

第1話

仁 side

どうも、火群仁です。なのはの世界に転生してから、早10年、早いもんだね。まあ、俺のいる所が海鳴市でなく、ミッドだったのは驚いたが、更に驚いたのが、父さんと母さんの容姿がREBO RNのツナと京子で、しかも名前まで同じきたからさあ大変

「ガオ！」

「おっと、サンキューナッツ。お蔭で、ぶつからずに済んだ」

「ガウ」

俺は肩に乗っている、相棒のナッツに礼を言った。ナッツと会ったのは6年前、家の庭の隅で丸まって寝ているのを見つけ、そのまま飼うことになった

「そう言えば、父さんが今日渡したいものがあるって言ってたけど、何だろっな」

「ガウ？」

「ナッツに聞いても解らねえか。まあ、楽しみにしてよっぜ」

「ガウ」

そして、その夜

「仁、こっちに来てくれないか？」

「うん」

俺は父さんに呼ばれ、リビングに降りてきた

「あれ、母さんは？」

「お風呂だ」

「あ、成程」

「仁、今朝言ったこと覚えてるか？渡したいものがあるって」

「うん」

「これを、お前に渡す」

父さんは俺に小さな箱をくれた

「……………これは？」

「開ければわかるよ」

そう言われ、俺は箱を開けた。開けるとそこにはリングが入っていた

「父さん、これって・・・」

「うん、仁のデバイスだよ。仁は魔法と格闘の基礎が出来てきたからね、そろそろ渡してもいいと思ってるね」

「俺の・・・デバイス」

「起動させてご覧」

「う、うん」

俺は箱からリングを取りだし、指にはめた。そして、魔法陣を展開した

「マスター認証、火群仁。術式は近代ベルカ。正式名称『レグルス』」

『認証確認、よろしく頼むぜ旦那』

「だ、旦那!？」

俺はレグルスの発言に驚いた

「レグルス、これから仁の事をよろしく頼む」

『まかせて下せえ、親方』

その後、俺は父さんにレグルスの性能を聞き、明日稽古をつけてくれると約束したので、興奮しながらベッドに向かった

第2話

仁 side

レグルスを貰った次の日、俺は父さんと、家の地下にある練習場
にきていた

「さて、準備はいいかい、仁？」

「勿論」

「じゃあ、始めよう。レオーネ、セットアップ!!」

『Setup』

父さんはグローブを装着しバリアジャケットを身に纏った (ボ
ンゴレ?世そのまんま)

「俺達も行くぞ、レグルス」

『あいよ、旦那』

「セットアップ!!」

『装着』

俺は籠手型のアームデバイスを装備し、バリアジャケットを身

に纏った

「あれ？右手の甲と左手の甲のマークが違うな」

俺が不思議に思っていると

『旦那、左手の甲のマークが違うのは、こっちの方にあるものが装備されているからだぜ』

「あるもの？」

『おうよ、左手の籠手は旦那のレアスキルの一つ、『重力』を操作できるようになってるのさ』

「へえ〜」

「仁、そろそろいいかい？」

「あ、うん」

父さんに言われ、俺は返事をした

「仁は魔法と格闘の基礎はもうできてるからね。足りないのは戦闘経験。だから、これから軽い模擬戦をやるよ。ルールは簡単、俺に一発でも当てることが出来れば仁の勝ち。そして、15分間攻撃に当たらなければ俺の勝ち。いいかい？」

「はい」

「じゃあ、始めよう」

そう言つと、父さんの雰囲気が変わつた

仁 side end

3人称 side

「……………」

仁は綱吉から放たれるオーラに冷や汗を流した。そして、

『Sonic move』

綱吉の姿が消えた

「っ!」

仁は反射的にしゃがむと、橙色の魔力を纏つた手刀が空を切つた。そして、仁は直ぐにその場から離れた

「いい反応だね」

綱吉は笑顔で言った

「……………父さん、今のアレを喰らつたら、絶対に首がおれたと思
うんだけど」

「大丈夫、ちゃんと加減はしているから」

「（…………あれで、加減してるって、本当かよ？）レグルス！
」

『Sonic move』

仁は綱吉から最初に習った高速移動で綱吉の左脇に移動した

「はあっ！！」

そして、魔力の纏った右拳を叩き込んだ

「……………」

綱吉はそれを、木の葉が落ちるような動きでかわし、掌底を仁に打ち込んだ

「があっ！！」

仁は吹き飛んだが、直ぐに受け身を取り、衝撃をいなすと、再び綱吉に突っ込んだ

「はあああああっ！！」

「がむしゃらに突っ込んできても意味は無いよ」

そして、綱吉は回し蹴りを仁に繰り出したが

『Sonic move』

当たる直前に高速移動を使い、後ろに回り込んだ

「はあああああっ！！」

「甘いー！！」

綱吉は振り向きながら裏拳を仁に繰り出した。だが、

『Sonic move』

仁は再び高速移動を使い、綱吉の後ろに回り込んだ

「貰ったー！！」

そして、炎を纏った拳を打ち込んだ。当たった瞬間、纏っていた炎が爆発し、黒煙が舞った。煙が晴れると、そこには仁の拳を止めている綱吉がいた

「うそー！？」

仁はシヨックを受けた。完璧に防御できない体勢に打ち込んだのだから、シヨックも大きい。仁は直ぐに綱吉との距離を取った。しかし、綱吉は構えを解き、笑顔だった

「・・・父さん？」

「この勝負、仁の勝ちだよ。ほら」

綱吉はマントの一部を仁に見せた、よく見ると、焼かれた跡があった

「一撃を与えたら勝ちって言ったけど、誰も体には言っていないからね」

「や、や、やったー」

仁はジャンプをしながらガッツポーズをした

「それにしても、最後の動きは良かったよ。当たる直前に高速移動で後ろに回り込み、追撃がきた瞬間、また後ろに移動し、防御できない体制の相手に攻撃する。どんなに強い魔道士や騎士でもまず反応できないね」

「でも、父さんは反応出来たよね？」

「うん。仁も知ってると思うけど、俺もレアスキル『超直感』があるからね。ギリギリで反応が出来たんだよ。仁も俺の攻撃を超直感で感じ取ったんだろ？」

「う、うん」

「でも、例え来るって解っても、体が着いて行けなきゃどうしようもないけどね。さあ、上に上がって、朝ご飯を食べよう、京子が待ってるはずだからね」

「はい」

そして、その日の夜、家のチャイムが鳴った

「あれ、誰だろう?」

「母さん、俺が出てくるよ」

そう言い、仁は玄関に向かった

「どちら様ですか?」

「仁君?クイントだけど」

「クイントさん?今開けますね」

仁が開けると、隣の家に住んでいる、ゲンヤさんとクイントさん、
そして見慣れない二人の女の子がいた

「え〜と(誰だ、この二人?)」

「仁?誰がきたのって、クイントさんにゲンヤさん。こんばんは」

仁が戻ってこないのって、綱吉と京子が玄関にやってきた

「こんばんは京子ちゃん、綱吉君。今日は火群家に私達の娘を紹介
介しに来たの。ギンガ、スバル挨拶しなさい」

「は、初めまして、ギンガ・ナカジマです。よろしく願いしま
す」

「えつと、・・・スバル・ナカジマです。よ、よろしく願いします」

「（ギンガとスバルだとー！？もうそんな時期なのかよ！？）
仁は驚いていた

「初めまして、火群京子です。よろしくね、ギンガちゃん、スバルちゃん」

「俺は火群綱吉だよ。よろしくね、ギンガちゃん、スバルちゃん」
綱吉と京子が二人に挨拶をした

「ほら、仁も」

「あ、うん。火群仁だ。よろしくな二人とも。つで、俺の肩に乗ってるのが相棒のナッツだ」

「ガオ」

「「よ、よろしく願いします」」

「ギンガ、スバル、仁君は二人より年上だから、好きに呼んでいいのよ」

「えつと、じゃあ、仁兄さんって呼んでもいいですか？」

「え？か、構わないけど」

「じゃあ、私は……仁兄って呼んでもいい？」

「あ、ああ」

仁が照れていると

「なんだ、仁。照れてるのか？」

「て、照れてなんかはないよ。ただ、兄さんって呼ばれるのが、なんか嬉しくて」

「仁君は一人っ子だもんね」

クイントが笑顔でそう言った。こうして、仁の慌ただしくも充実した一日が終わった

設定

名前 火群 仁（ほむらじん）

年齢 10歳 原作開始時は19歳

容姿 REBORNの超ツナ

魔力量 S

魔力光 オレンジ

ランク 10歳時AAA 19歳時 S+

変換資質 炎熱

レアスキル 超直感 重力操作 調和 魔力吸収

BJ シモン編で着ていた服

神に間違つて殺された少年、特典を4つ貰い、なのはの世界に転生した。性格はツナと同じである。魔法学校に通っており、勉強の方はそこそこだが、実技では年齢に似合わずトップレベルで、教師でも中々当てられないスピードを持っている

デバイス レグルス インテリジェンドデバイス AIは男性

待機状態 大空のリングと大地のリングが一つなったもの（RE
BORN参照）

起動時 ガントレッド（形状はXグローブVer.Xの形態変化
版。尚左手の甲のマークは炎真のマーク）現在はカートリッジを装
備してないが原作開始時には装備している（装着場所右手のバン
グ
ル部リボルバータイプ）

仁が神に頼んだデバイスを綱吉が渡した。仁の事を『旦那』と呼
んでいる。尚、綱吉が持っているデバイス『レオーネ』を模して造
られた兄弟機である

ナッツ 神様に頼んで得た仁の使役獣、いつも仁の肩又は頭に乗
っている。戦闘時はその姿の通り獅子のごとく相手を倒す。フリー
ドのように炎を吐いたりできないが、パワー、スピードはフリード
以上で、炎を身に纏った突進や、地面から炎の柱を出して戦う。戦
闘形態はXANXUSのベスタ 見たいでオレンジ色の身体でVer
r.Xのようなパーツがついている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0993z/>

魔法少女リリカルなのは ~大空と大地~

2011年12月4日01時56分発行